

# アトリエ 琉游舎 だより 21号

アトリエ琉游舎 [ryuyusha.com/](http://ryuyusha.com/)  
 琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

2018年2月28発行

おかげさまで **21号** となりました

- ・昨年6月に第1号を発行して以来、ほぼ2週間に1回のペースでお届けしている「琉游舎だより」が今号で21号を数えるところとなりました。ご愛読ありがとうございます。
- ・ところでなぜ切りの良い20号ではなく、奇数の21号でお礼を申し上げるかと言えば、琉游舎では三と七の数字はとてまなじみが深い数字なのです。三法印、三宝、三昧、三毒、七宝、七条、七仏、七施など三や七にまつわる言葉が琉游舎には充ち満ちています。
- ・日常の生活サイクルの一週間はもちろん7日。仏教では命日を起点として、七日ごとの日を忌日と呼びます。ニワトリは七日を三回重ねた二十一日でヒナになり、私たち人間の受精から出産までの期間は7×38週の266日。7という数字は私たち生きものの生や死のサイクルの中に記憶として埋め込まれている数字です。3という数字は私たちの行動や倫理観を簡潔に数え上げるのにちょうど良い数字。2つでは少なすぎ5つでは多すぎで、ちょうど3つくらいが覚えるにも教えるにもちょうどいい数。
- ・なんかこじつけのようですが3×7=21号。と言うわけであらためてご愛読ありがとうございます。今まで以上に琉游舎をご愛顧頂ければ幸いです。

**読書会は3月13日(火)13時半から 法華経譬喩品第3の前半を読みます。**  
 分かったことは分かったままに、分からないことは分からないままに読んでいきましょう。

**詩話会は3月17日(土)13時半から 詩人岩田宏の詩を読みます。**  
 ユーモアと言葉遊びと諧謔とそして叙情の詩人。翻訳家小笠原豊樹としても著名です。

## 3月のスケジュール表

			3月1日 映画会 13:30	2	3	4 写経会 13:30
5	6 写経会 13:30	7	8 映画会 13:30	9	10	11
12	13 読書会 13:30	14	15 映画会 13:30	16	17 詩話会 13:30	18
19	20	21 彼岸会法要 10:00	22 映画会 13:30	23	24	25

映画会  
毎週木曜日  
13時半から  
ラインナップは  
第20号を  
ご覧ください。

3月4日(日)  
3月6日(火) **写経会**  
13時半から

**春の彼岸会法要**  
3月21日春分の日10時から

## 狂言綺語・・・自然(じねん)

1月に降った雪が北側の斜面ではずっと融けずに残ってもう一ヶ月になります。ところが2月の下旬に降った雪は春雪。1日であっという間に融けてしまいました。そのようなわけで今もコリーナの所々に見られる雪は1月の冬雪です。自然が毎年そっくりそのままコピーされるわけではないにしても、これも毎年繰り返される同じような自然の時の流れの一コマなのでしょう。

山や海などの環境やひと以外の生きものなど、人為が加えられていないものを私たちは「自然」と呼びます。「自然」は「しぜん」と読みます。何をいまさらと思われるかもしれませんが、実は明治以前は「自然」を「しぜん(漢音)」ではなく「じねん(呉音)」と呼ぶ呼び方が優勢だったようなのです。古代の日本人は山や海などの自然の姿に神を観てきました。平安貴族は山川草木の自然の移ろいに無常を観てきました。明治以前の日本人が持っていたのはこのような精神的な自然観だけで、明治時代に輸入された客観的・自然科学的な自然観＝「nature」はなかったのではないかと考えます。「nature」の訳語として探し出されそこに科学的な自然観を背負わされたものが、現在私たちが日常的に使用している「自然」という言葉なのではないでしょうか。

そこで今回は「nature」の訳語としての「自然」ではなく明治以前の「自然(じねん)」について少し考えてみます。日本に仏教が渡来したときお経はすべて漢音ではなく呉音で唱えられました。ですから中国からの輸入語である「自然」も呉音の「じねん」と読まれました。これを読み下すと「自ずから然る(おのずからしかる)」です。これは、おのずからそのままそうであること、あるがままのすがたということです。人為が加えられていないありのままのすがた、それはお釈迦様の言われる、物事をありのままに観ることによって感得できるそのものの真実のすがたであることを意味しています。仏教用語で言えば「実相」です。日本人にとって本来「自然」という言葉は、山川草木という自然環境も含めた宇宙のありように対してのとらえ方を表すとても精神的思惟的な言葉なのです。

法華経囑累品第22の中に「能与衆生 佛之智慧 如来智慧 自然智慧」という一説があります。佛の智慧は実相を見通す真実の智慧。如来の智慧は衆生を救う大慈悲の智慧。自然の智慧は自ら心の中に生じた信仰の智慧。この3つの智慧を仏様は私たちに授けてくださると述べられているのです。どのような宗教であろうともその根本にあるものは「信」です。そして「信」を全うするためには「智慧」が必要です。「信」という宗教の心臓を動かし続けるために必要なエネルギーが「智慧」と言ってもいいでしょう。その「信仰の智慧」は「自然の智慧」として説かれています。誰からか与えられるわけでもなく強制されるわけでもなく、計らいを捨てて、あるがままに身を置くことによって、自ずから然らしむ自然の智慧です。ところで「信」は自然に得られるものであるなら、信ずる誰かにひたすらすがって祈りすればいいと考えることもできます。仏さまはそこに智慧が必要だと言われているのですが、でもその智慧も自ら計って得られるものではなく、自然の智慧だと言われています。だったらやっぱり何もしないでいいのではないか、自分たちを導いてくれる誰かにすがりすればいいのではないかなってしまいがちです。でもそれは果たして「信」でしょうか。

私は「信」とは「願い、誓い、行う」ことだと考えます。「自然」はもののありのままのすがたです。私たちがそのすがたをありのままに観ることを「願い」、ありのままに観ることを「誓い」、ありのままに観ることを「行う」ことそのものが「自然」なのです。「信ずれば自然にあなたには与えられるものがあります」と言うような文言はもうすでに「自然」ではありません。それは与えられる「こと」や「もの」のために信じているのであり、仏さまの「教え」を「願い、誓い、行う」ことつまり「信」とは似て非なるものです。明治以前まで「自然」という概念は肯定的、否定的両方の評価があったようです。大雑把な要約ですが「自然＝何もしなくていい」となれば否定的、「自然＝教えへの信」となれば肯定的、と言うことでしょうか。「教えへの信」がない「自然」はもう「自然」とは言えないのです。

私たちの慣れ親しんだ自然(しぜん)という言葉は環境と言い換えてもいいでしょう。自然(じねん)はその環境をも包括した宇宙のありようそのものを表す言葉です。日本古来の主体的で精神的な「自然観(じねんかん)」をもってもののありようを観ることができれば、環境や社会そして日々の私たちの生活すべてが「ありのままのすがた」＝「自然」として立ち現れてくると私は信じます。

山芋のことを自然薯(じねんじょ)と言います。あるがままに山の土の中に生えて、一つとして同じ形のない作物。私は今ここにあることが「自然」であると観ることで日々を過ごし、ここ琉游舎のこの場所が「自然処(じねんじょ)」と呼ばれる処でありたいと考えています。それではまた次号でお会いしましょう(出琉)

琉游舎：戸井 出琉・恭子

お問い合わせ先：0287-53-7848 08033508152

矢板市大槻2319-17コリーナ矢板C-850

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/

琉游舎for healing <https://toi10izuru.wixsite.com/mysite-3>